およぐひと

萩原朔太郎

作者

萩原朔太郎

明治十九（一八八六）年～昭和十七（一九四二）年。詩人。群馬県群馬郡前橋市北曲輪町に父密蔵、母ケイの長男として生れる。父は東京大学医学部別科を卒業し、群馬県立病院副院長を経て、自宅で開業していた。大正七年には前橋医師会長に選ばれるなど、信望の高い医師であった。明治三十三年、前橋中学に入学。一年生の頃から同居していた従兄の萩原栄次の影響で鳳晶子（与謝野晶子）の歌集「みだれ髪」を読み、短歌に傾倒した。校友会誌「坂東太郎」に短歌などを発表し、回覧雑誌「野守」を友人たちと出した。「明星」に短歌を投稿し、新詩社の社友となった。詩人の一生を貫く浪漫精神は、ここに胚胎するとみられる。学業においては三十七年に前橋中学を五年進級の際、落第。三十九年に前橋中学を卒業し、翌四十年九月、第五高等学校（熊本）英文科に入学するが、翌四十一年には二年に進級できず第六高等学校（岡山）独法科に入学。しかし四十三年には退学する。その後慶応義塾大学予科に在籍したり、上野の東京音楽学校（現、東京芸術大学）へ進学する計画を立てたり、京都大学文学部を受験したりするが、悉く失敗した。将来への展望が開けないまま、文学のほか、哲学、キリスト教、西洋趣味としての音楽、演劇、絵画、写真、映画等に関心を向け、創作も短歌から詩へと移っていく。

大正二年、北原白秋の主宰する「朱欒」五月号に「みちゆき」（「純情小曲集」収録の際に「夜汽車」と改題）ほか六編の詩を発表。同じ号に掲載された室生犀星の「小景異情」を「今の詩壇では見ることのできない純な真実なもの」と評する書簡を犀星に送り、生涯続く交友のきっかけとなる。大正三年に詩・宗教・音楽の研究を目的とする人魚詩社を設立し、翌年三月、雑誌「卓上噴水」を創刊（～第三集、五月）。さらに五年に犀星と「感情」を創刊し、三木露風らの観念的象徴詩に対抗し、詩壇を刺激した。六年第一詩集「月に吠える」を出版。情緒や感覚の次元でしか捉え得なかった近代人の不安の情動を、深い生命の声として形象化し、詩壇に戦慄を与えた。八年、上田稲子と結婚。翌年に長女葉子、十一年に次女明子（あきらこ）が生まれた。同年、アフォリズム集「新しき欲情」を刊行。思想詩の新たな表現を提示した。十二年、第二詩集「青猫」を出版する。「全く疲労の椅子に身を投げ出したデカダンスの悲哀」（「定本青猫」序）を主調とする世界を口語を柔軟に駆使することで描き出した。付録として書かれた「自由詩のリズムに就て」では、心内の節奏と言葉の節奏との一致を主張している。

十四年、妻子を連れて上京するが、経済的な支えは家からの援助であった。同年出版された「純情小曲集」は、初めて詩を書いた頃の「なつかしい思ひ出」の〈愛憐詩篇〉と愛憎こめた故郷への思いを記した〈郷土望景詩〉の二部構成で、文語で表現されて

いる。その後、ダンスに端を発した家庭崩壊から昭和四年、妻との離婚により二児を伴い帰郷。五年の父の死後、二児、妹アイ、母と東京に住むようになる。八年には自己設計の家が完成した。九年出版した「氷島」では、生活上の挫折、漂泊者としての虚無と寂寥を漢文訓読調で激しく表白している。

詩集だけでなく、アフォリズム集「虚妄の正義」（昭四）、「絶望の逃走（昭十）や詩論集「詩の原理」（昭三）、エッセイ集「純正詩論」（昭十）、「日本への回帰」（昭十三）、小説「猫町」（昭十）、随筆集「廊下と室房」（昭十一）、古典鑑賞「郷愁の詩人与謝蕪村」（昭十一）を出版。さらに詩集においても「定本青猫」（昭十一）で〈青猫〉世界を、「宿命」で〈散文詩〉と〈抒情詩〉の二部構成に編集している。詩的直観力と文明批評家の眼により日本の近代を問いなおすスタンスをとり続けた晩年の著作の批評的意味は大きい。十七年五月、東京世田谷の自宅で急性肺炎のため死去。五十五歳であった。

作者を解くカギ

詩集「月に吠える」は文語詩から口語詩へと変化する、その俎上にあった。朔太郎は大正四年六月以降、詩作を中断し、大正五年五月に再び詩を発表するが、中断以前が文語詩、再開後が口語詩と傾向としては大まかにはいえるが、中断する直前には口語詩を発表している。また文語詩においても口語詩的要素、口語詩においても文語的要素は含まれている。

「およぐひと」（大正五年五月「ARS」）の所収された「くさつた蛤」の章は中断直前の詩と再開直後の詩が収録されており、口語詩が中心となっている。

出典

本文は「荻原朔太郎詩集」（思潮社　昭五十）によった。

「月に吠える」（大六）の「くさつた蛤」の章に所収。初出は山村暮鳥が主宰した「LE・PRISME」第二号（大五・五月号）。題名は「およぐひと（泳ぎの感覚の象徴）」であった。ともに発表された詩「椅子」にも題名に（静物よりきたる感覚の象徴）が付されていた。初出と詩集所収形には、「胴体」→「心臓（こころ）」、「透きとほる」→「すきとほる」、「およぐひとのこころ」→「およぐひとの瞳（め）」、「月をみる」→「水のうへの月をみる」の異同がある。

主題

泳いでいるときの全身で水にふれる感覚を象徴的に表現した。日常感覚とは異質な感覚世界を描いている。

構成

第一行〜第二行目
　およぐひとのからだの形態
第三行〜第四行目
　およぐひとの「心臓（こころ）」と「瞳（め）」について
第五行
　およぐひとの「たましひ」について

指導上の注意点

●二八八ページ

問　この詩から、どのような情景が浮かぶか。

答　夜の海に体をななめに伸ばし二本の手を長くそろえて浮かぶおよぐひとの姿、陸の方からつりがねの響きが聞こえる。水の上には月が映っている。

問　「心臓（こころ）」が「くらげのやうにすきとほる」という直喩表現は何を表そうとしているのか。

答　およぐひとが水の中に身を浸し、体全体が水と同化するような感覚となったとき、心臓もくらげ同様に透きとおったように感じられる。

問　◉「心臓」を「こころ」、「瞳」を「め」と読ませることで、どのようなことを表現しようとしたのか。

答　「心臓」を「こころ」と読ませることで、単に臓器としての心臓ではなく、精神を表すものであることを表そうとしている。見える世界だけでなく、見えないけれどもある精神性を併せ示そうとしている。また「瞳」に「め」と読み仮名をふることで、単なる視覚機能ではなく、日常感覚を超えた世界を暗示している

語句の研究

●二八八ページ

3およぐひとの心臓（こころ）はくらげのやうにすきとほる、「心臓」と「くらげ」が透きとおるものとして結び付けられた直喩表現。「心臓」が透きとおることは考えられないが、水の中に体を浸したりするとき、体が水と同化したような感覚になると「すきとほる」感じは身近なものになる。また見える臓器としての心臓を見えない「こころ」と二重にすることで、「すきとほる」イメージを強めている。初出は「およぐひとの胴体はくらげのやうに透きとほる、」となっていて、肉体のイメージが強い「胴体」であり、意味と一体化した漢字「透きとほる」が用いられている。

4およぐひとの瞳（め）はつりがねのひびきをききつつ、瞳（ひとみ）は光線の入るところで、光などの刺激の強弱によって、狭めたり広げたりする。明るいときや近くの物を見るときは縮小し、暗いときや遠方を見るとき、驚いたときには拡大する。心理的なものにも反応するこの目の大事な機能の部位を「め」とすることで、この詩においては単なる視覚器官ではなく、音をまるで見るかのように感じとるさまを表現した。つりがねは寺院の鐘楼などにつるしてある大きな鐘のこと。「瞳」について久保忠夫の注（「日本近代文学大系 37　萩原朔太郎集」）では「すずしさや鐘をはなるる鐘の声」（蕪村）の句を紹介している。

5およぐひとのたましひは　「たましひ」は生きものの体の中に宿り、心の働きをつかさどるものとされているが、こころの内部からの視線が示されている。

5水のうへの月をみる　初出では「月をみる」となっていて、直接、空の月に視線を向けることになっていたが、水面に映る月に視線を向ける形に変更された。実体ではなく幻の像としての月を意識した表現。

鑑賞

初出は山村暮鳥が主宰した「LE・PRISME」第二号（大五・五月号）。題名は「およぐひと（泳ぎの感覚の象徴）」であった。ともに発表された詩「椅子」にも題名に（静物よりきたる感覚の象徴）が付されていた。萩原朔太郎はこの二編の詩に（感覚の象徴）を表現しようとしていたことが分かる。

何を見たのか、何を聞いたのか、何を嗅いだのか、何を触ったのか、何を味わったのか、その対象をいうことは簡単だが、体で感じたものを言葉で表そうとすることは難しい。『月に吠える』の自序で朔太郎は「私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「ことがら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらひたいことである。」と書いていた。

「椅子の下にねむれるひとは／おほいなる家をつくれるひとの子供らか」という二行の詩「椅子」は、椅子という静物から感じとったものを、椅子の下にねむるひとでしかも「おほいなる家をつくれるひとの子供ら」とするという幻像として象徴的に表している。

「およぐひと」にも（泳ぎの感覚の象徴）と付記されていたように、水の中を泳いでいるときの感覚を表そうとしたものである。地上にいる日常とは異質な感覚世界で、水の中に体が溶けだし水そのものとなった様な感覚、水と同化したような身体感覚は泳いだ者であれば誰でも思い起こせるもので、「およぐひとの心臓（こころ）はくらげのやうにすきとほる、」という奇妙な表現もその感覚を表していることが分かれば、納得できるであろう。初出では「およぐひとの胴体はくらげのやうに透きとほる、」であり、透きとおるものが胴体という肉体そのものだった。その「胴体」を体の中枢部位の「心臓」でしかも見えない精神を意味する「こころ」と読み仮名をふることで、形態的にもくらげと通じやすくした。「およぐひとの瞳（め）はつりがねのひびきをききつつ、」においても視覚機能をもつ「瞳（め）」を聴覚機能に結び付けることは、読む人を戸惑わせる。しかし泳ぎの感覚は地上の日常とは異質であり、心理的なものにも反応するこの目の大事な機能の部位を「め」とすることで、単なる視覚器官ではなく響きを聞くという通常感覚を超える機能を持たせ、音をまるで見るかのように感じとるさまを表現した。最終行で「たましひ」が見るものを、「月」から「水のうへの月」に変えたのも、実体ではなく映った幻像としての月とすることで、心に映る世界であることを暗示している。

「およぐひと」の収められた章「くさつた蛤」には「なやましき春夜の感覚とその疾患」とあり、疾患と結び付く感覚世界を表そうとした章であることが示されている。

この章の冒頭の詩は「内部に居る人が畸形な病人に見える理由」だが、家の内部にいて窓かけのれいすのかげに立ち、遠めがねで外を見、けさ「きやべつの皿」を食べ過ぎ、粗製の窓硝子なので、外からは顔がうすぼんやりと、瞳（め）がいくらかかすんで、また顔が甚だしくゆがんで見えることになると、「わたし」は説明する。

だが、「わたし」は「私をみつめてゐる」「薄気味わるく笑つてゐる」「君」を意識し、「わたくし」は「健康すぎるぐらゐなもの」と強調する。一見、道理ある説明をしているようだが、遠め

がねで見ているものは「につける製の犬だの羊だの」「あたまのはげた子供たちの歩いてゐる林」で、奇妙なものだが「わたし」の口ぶりからは奇妙とは見ていないことが分かる。最後に腰から下がはっきりしないのは、馬鹿げた疑問で「青白い窓の壁」にそって家の内部に立っているからだと説明を加える。外部の人に自分が病人と見えることに気づきながら、その視線に苛立ち自分は健康すぎるものだと強調するが、道理あるような説明は奇妙に空転する。内部感覚を描こうとする難しさ、構造を描いた詩ともいえる。

「およぐひと」の前におかれた詩は「ばくてりやの世界」だが、ここでは目には見えないが「およぐもの」として生きて存在する「ばくてりや」が描かれている。「ばくてりやの足、／ばくてりやの口、／ばくてりやの耳、／ばくてりやの鼻／ばくてりやがおよいでゐる。／あるものは人物の胎内に、／あるものは貝るゐの内臓に／あるものは玉葱の球心に、／あるものは風景の中心に。」というように細菌である「ばくてりや」の知識をベースにおよぐ「ばくてりや」を可視化したのである。

「およぐひと」にみられるように、萩原朔太郎は日常に見える世界の感覚を突き破り、見えない内部感覚を言葉によって表現した。

参考

・「萩原朔太郎全集　第一巻」月に吠える　筑摩書房　昭五十

「月に吠える」序（抄）

私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「こと がら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらひたいことである。私の心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他の言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である。そのリズムを無言で感知することの出来る人とのみ、私は手をとつて語り合ふことができる。

「ありあけ」

ながい疾患のいたみから、
その顔はくもの巣だらけとなり、
腰からしたは影のやうに消えてしまひ、
腰からうへには藪が生え、
手が腐れ、
身体（しんたい）いちめんがじつにめちやくちやなり、
ああ、けふも月が出で、
有明の月が空に出で、
そのぼんぼりのやうなうすらあかりで、
畸形の白犬が吠えてゐる。
しののめちかく、
さみしい道路の方で吠える犬だよ。

「春の実体」

かずかぎりもしれぬ虫けらの卵にて、
春がみつちりとふくれてしまつた、
げにげに眺めみわたせば、
どこもかしこもこの類の卵にてぎつちりだ。
桜のはなをみてあれば、
桜のはなにもこの卵いちめんに透いてみえ、
やなぎの枝にも、もちろんなり、
たとへば蛾蝶のごときものさへ、
そのうすき羽は卵にてかたちづくられ、
それがあのやうに、ぴかぴかぴかぴか光るのだ。
ああ、瞳（め）にもみえざる、
このかすかなこの卵のかたちは楕円形にして、
それがいたるところに押しあひへしあひ、
空気中いつぱいにひろがり、
ふくらみきつたごむまりのよに固くなつてゐるのだ、
よくよく指のさきでつついてみたまへ、
春といふものの実体がおよそこのへんにある。

参考文献

❊教師用

「伝記萩原朔太郎」上・下　嶋岡晨　春秋社　昭五十五
「萩原朔太郎」（鑑賞日本現代文学12）久保忠夫編　角川書店　昭五十六
「萩原朔太郎詩私解」那珂太郎　小沢書店　昭六十
「萩原朔太郎〈感情の詩学〉」（日本文学研究資料新集24）坪井秀人編　有精堂　昭六十三
「萩原朔太郎論」上・下　久保忠夫　塙書房　平元
「新文芸読本　萩原朔太郎」　河出書房新社　平三
「萩原朔太郎〈日本文学研究大成〉」田村圭司編　国書刊行会　平六
「萩原朔太郎〈言語革命論〉」北川透　思潮社　平七
「伊藤信吉著作集　第二巻」伊藤信吉　沖積舎　平十三
「萩原朔太郎」1、2　飯島耕一　みすず書房　平十六
「国文学　解釈と教材の研究」学燈社　昭四十八・十一、五十三・十、平元・六、平十二・一
「国文学　解釈と鑑賞」　至文堂　昭五十二・六、五十七・五、平十四・八
「萩原朔太郎というメディア」安智史　森活社　平二十
「現代詩手帖」　思潮社　平十一・二、平二十三・十

❊生徒用

「萩原朔太郎」磯田光一　講談社　平五
「萩原朔太郎」大岡信　筑摩書房　平六
「萩原朔太郎」三好達治　講談社　平十八